

きょうと福祉倶楽部だより

2024年 第9号

心に残ったひとたち④－看護師だったクニさん

ある日、事務所に一本の電話がありました。
地域にあるさまざまな願いを叶えるために活動をされてきた女性からでした。
「長岡にご主人亡き後一人で暮らす人が認知症になった」
「一人暮らしは無理と言われ妹さんが一緒に住むために連れ帰っても家に帰ってきてしまうの」と。
妹さんとお会いしてさらに事情を聞きました。

すると主治医の先生から
「一人で暮らすのは無理だから施設に入れるか、一緒に住むか決めてくださいといわれて、私の家に連れて帰りましたが何度連れてきても家に帰ってしまうのです」「施設はお金がかかりますので施設は選択できません」と。
その表情には不安がにじみ出ていました。
クニさんは長く看護師として働き、病院の管理の中心で働いていたそうです。そして退職後夫と出会い結婚しますが、夫を亡くしてしまいます。そこからは一人暮らしです。

わたしたちはクニさんが一人住むご自宅を訪問しました。ご自宅には夫と出合って「祝う会」で笑うクニさんの写真もありました。室内はパートナーが残したであろう書籍がいっぱいです。窓が閉じられ昼も薄暗い部屋の2階にクニさんはいました。

床中ゴミが積もった部屋に向かって声をかけます。するとゴミの陰からクニさんが顔を出しました。表情はとても厳しいものでした。

とにかくクニさんがここで暮らせるように考えてみよう私たちの取り組みが始まりました。

これまでの主治医は病院の非常勤です。普段は病院にいません。いつでも相談、受診ができる医師が必要です。そこで地域の開業医さんに治療を委ねました。そして訪問看護もその先生に指示を出してもらいました。

介護保険の介護度も実情に合っていない。新しい主治医に医師意見書を書いてもらいあらたな介護認定も受けました。

孤立していた一人暮らしから人との繋がりも取り戻すために介護サービスも様々導入しました。

クニさんの成年後見人とも様々な協議が必要でした。ゴミであふれた部屋の片付けにもお金が必要でした。そのお金のやりくりも考えなければなりませんでした。

それらの課題をケアマネージャーやホームヘルパーが知恵と力を合わせ、一つずつ変えていきました。

そんな積み重ねが実ってクニさんの顔に笑顔が戻ったのです。あの笑顔がケアに当たる皆の自信と喜びになったのです。

あれから10年。今もクニさんはご自宅で暮らしています。

10年の歳月はクニさんを着実に最後のステージに向けて歩いています。

これまでは夜間の一人の外出で帰れなくなったりいろいろなことがありました。

ヘルパーもその都度対策を医師などの関係者と相談し、乗り越えてきました。

いまはそんなこともなくなり「うとうと」の時間も増え、食事の量も減ってきました。

それでも時々目を開けておどけた表情を見せてくれます。

クニさんのこの表情が少しでも長く見られるようにこれからもチームで挑みたいと考えています。